

主論文の要約

論文題目：棺材をめぐる「孝」の言説と実践—陝西省韓城市党家村を事例として—

氏名：伊藤ひろみ

論文内容の要約：

序章

ここでは本論の研究背景と問題の所在を明らかにし、「孝」と「儀礼」にかかわる先行研究を概観したあと、研究方法、調査地の概況、章立てを示した。

研究背景としてまず、棺材の準備という習俗を本論の研究テーマにしたきっかけと、明代の小説を事例に、棺材が中国の儀礼の中でどのような言説となって表れたのかをみた。主として葬儀を通してみる棺材については、現代においても、死者の霊を棺内に確実に留め、「死者の霊の危険な側面を制御し、操縦し、慰撫」し、死者と一緒に有用な物品を他界へ送り、「生者と死者のやりとり」を成立させるために重要な役割を担っていた。

問題の所在として、本論の観念領域である「孝」の観念についての位置づけと、実施領域である儀礼における棺材の位置づけをおこなった。棺材の準備は、親を安心させるための「孝」の観念に基づきおこなわれるといわれるが、その「孝」の観念とは「中国人の心の中には祖先とそして子孫があり、自分を、上下をつなぐ一環とみなす（費1983）」といわれるように、祖先・親・子は生命の連続としてとらえられる。このような観念は、漢民族を中心とした中国の家族秩序の思想的基盤として受け継がれてきたと考えられる。また、死者である祖先と、生者の子孫との相互関係が正しく維持されることに重きが置かれる観念には、マニュアルとしてのテキストや専門家、経験豊かな知識人の存在は不可欠であった。そして「孝」の観念では、親子関係は一つの社会秩序であり、親や子という社会的役割に期待される行為モデルに従うことで、社会的理想が実現すると考えられた。「孝」は家族や一族の結束の重要性を強調するために、直面する分裂した、危険な状況を処理するために有効であった。このように国家や一族の弱体化と「孝」の隆盛はリンクしており、現代の「孝」の観念もその社会の背景と無関係ではないと考えられる。

儀礼の位置づけとして、儀礼体系には構造の類似点があり、分離、過渡、統合の三過程の経験が組み込まれること、その各段階は、分離：ある状態から別の状態へ移行する際には、「象徴的に死ぬ」必要があり、異なる集団の段階や地位を際立たせるための特定の形式や言動、祭器が必要となった。棺材は、このような儀礼の基本構造にたち、過寿儀礼の前後において準備され傍らに保管され、喪葬儀礼に使用され、祖先祭祀儀礼では、祖先の家として存在し続けるものととらえられる。

研究方法是、現地調査と文献研究により、現地調査は2007年2月～2015年3月の期間に9回おこなわれ、主要文献は、主に1980年以降の観光、養老、「孝」、祝寿、喪葬、

祖先祭祀関連の著作、論文と、韓城縣志、孝経などの古籍を引用、参照している。

第1章 「歴史文化名村」党家村—「歴史文化」と「伝統」をめぐって

この章では、党家村の伝統的背景についてみていった。党家村は1980年代後半からの日中連合古民居調査により、明清時代の四合院群が文化財として認識され、2003年には「歴史文化名村」となった。中国の観光政策からみる「歴史文化」は、伝統文化とほぼ同義で用いられ、正統な、価値のあるという語感をもっている。このような党家村の「歴史文化」は、中国の政治的、経済的文脈においてどのように再構築されているのか、歴史文化を担う人々の言説から考察した。

党家村には「歴史文化」がある一方で、村人が語り、実践してきたもう一つの見せない「伝統」、すなわち棺材の準備などに代表される「伝統的習俗」がある。党家村に共存する、公的概念の「歴史文化」と「伝統習俗」の位置づけをし、これら二つの異なる「伝統」が党家村でどのようにとらえられ、村人の伝統的背景となっているのか、日常的な実践と言説をもとに考察をした。また、継承されてきた「孝」の観念の地域的背景を縣志などから探る。本論の焦点となる棺材については、韓城地域の特徴を概観した。

第2章 「孝」に基づく養老の現在—四合院における家族秩序と「孝」の委託

四合院は、中国の理想の養老とされる同居同財を構造的に体現したものといわれる。この章では、「歴史文化」の象徴でもあり、村人の住居を兼ねる四合院を一つの枠組みとして、党家村の家族秩序と、「孝」の観念で重要視される子が父母に善く事える養老の実践を考察した。中国社会の親族関係は祖先、親、子の連続性が重視され、親への敬愛を示す「養老」、親が祖先集団に組み込まれ、子孫継嗣を示すための「喪葬」、祖先祭祀である「祭祀」はその孝子の三つの重要なつとめであった。喪葬儀礼を執り行う息子は孝子と呼ばれ、「孝」との深い関わりを象徴していた。党家村における「孝」の観念は、親族に、家族に脈々と受け継がれてきた日常の実践や言説の中に存在し、現代の社会背景や、家族や共同体の人間関係とも密接に結びついていた。

近年、中国はさまざまな要因により家族倫理の呪縛は薄れ、伝統的家族養老の機能は弱体化し、2013年には「中華人民共和国老年人權益保障法」の改正がおこなわれ、老人の高齢者施設などでの生活保障も確立された。家庭養老が当然のこととされた中国の農村にも、このような養老のさまざまな問題が出現し、養老院などに「孝」を委託するケースもみられた。村という共同体の中で異端視される「不孝」は、社会の調和の根源である役割概念への違反であり、社会の調和を乱すことと同義であったため、身を滅ぼし、家を滅ぼすという罪としてとらえられる。このような「孝」の観念に基づく養老の実践を、四合院、家族秩序、「孝」の委託、「不孝」などのキーワードとともに考察した。

第3章 儀礼からみる「孝」の実践1 —党家村の過寿儀礼—

本章では、親が老境に入る頃おこなわれる「孝」の実践の一つである、厄を払い、長寿を祝う過寿儀礼について考察した。党家村では老境に入ることを「破老」といい、中年から新しい老年という段階に入るときに関門があることが、その破るという言葉に象徴されていた。2013年現在、60歳以上の老人の村人口における比率は18.2%（筆者の2013年調査による）で、4～6人世帯が最も多い党家村では、一世帯には大体老人が一

人いることになる。長寿を祝う過寿は、誕生日ごとに毎年おこなわれるものと、70、80、90歳などの10歳ごとにおこなわれる「大寿」の儀礼があった。

党家村にはこの頃に準備される棺材の良し悪しが、親に事える孝子の「孝」の尺度となり重視される実態がある。棺材はこのような伝統的観念の象徴であり、同時に「孝」の象徴である。党家村における過寿儀礼の多様化を事例の分析とともに、本論の焦点となる棺材が、「孝」の実践として過寿儀礼の場でどのように存在するのか、考察をおこなった。過寿儀礼の対象となる党家村の老人の背景を検証し、党家村が属する華北・西北地域の過寿民俗を概観した後、過寿儀礼の構造的側面から、儀礼の中の各習俗の標準化を試みた。

第4章 儀礼からみる「孝」の実践2 一党家村の喪葬儀礼一

この章では喪葬儀礼から「孝」の実践と言説を考察した。ここでは、棺材は人目のつかない所に保管される状態から、儀礼の中心に位置するようになり、死者を厚く弔うことと同義とされ重視された。喪葬儀礼の中では、生者と死者の間の「やりとり」と死者と子孫の相互関係は承認された手順にそって正しく遂行されることが重要であった。

喪葬儀礼を構造的側面からみると、分離、過渡、統合という三つの段階のうち過渡の状態が長く、統合は最も複雑で重要視され、この際に服喪などの禁忌が解除される。過渡期の本質的な目的は、肉体を除去するか、肉体が朽ちるのを待つことであるため、二年から三年続くことが多い。これは「孝」でいう三年の喪や、改葬などの死後祭祀の期間と重なっていた。この時期に用いられる棺材は、あの世への旅の間、および落ちてからからの必要なものを供給すること、魂の帰り道をふさぐことが主な目的となる。

中国華北の葬礼は(1) 炕から寝台の移動と寿衣の着衣(2) 入棺と物品の移送(3) 陰陽先生による吉日や墓地の算定と通知(4) 弔問と喪服の着衣(5) 位牌の準備(6) 棺の密閉と葬送(7) 墓穴への供物と埋葬(8) 死後祭祀という流れが一般的であるが、党家村でも(5)を除けばほぼ同じ順序をたどっていた。儀礼の中のそれぞれの習俗や、棺材をめぐる喪葬儀礼のいくつかの事例から、伝統と変革の狭間にあるもの、棺材にこだわらないもの、急な棺材の準備が必要だったものなど、党家村民の棺材への観念を探った。そして清代末からの殯葬改革、文革期を経て、火葬化政策がとられる中、韓城市の葬儀行政を踏まえながら、党家村で今でも残る、根強い土葬への思いについてその言説から考察を試みた。

第5章 儀礼からみる「孝」の実践3 一党家村の清明節の祖先祭祀儀礼一

この章では、2008年に法定の休日となって国家の規範的な公式の文化として位置づけられた清明節という祖先祭祀を中心に、孝子の「孝」の実践という視点から、党家村の死後祭祀から墓の選定、それ以降の墓参と祖先祭祀の実態をみた。

建国以降、党家村でも父系出自集団による墓参や祖先祭祀の形式は徐々に失われ、祭祀者の父母、祖父母といった比較的系譜の浅い祖先に対する祭祀が一般的となっている。祭祀を導く総管、風水師と、祭祀の主体となる孝子の視点から、亡くなった親を祖先に確立させるために、どのような手続きが踏まれるのか、党家村における七七忌、百日などの段階的死後祭祀システムを概観し、考察を加えた。また、党家村において清明節の墓参が孝子によって具体的にどのようにおこなわれたのかについて検証した。祖先という地位を確立するために必要な「死」という段階から、孝子が親を祖先とする正統な祭祀をどのように完遂するのか考察を試みた。親族制度や宗教信仰の一部と

して捉えられてきた漢族の「祖先」が、党家村においてどのようにとらえられているのか、村人の言説から考察を加えた。

終章

ここでは何が明らかになり、そこから何が導き出されるのかについて章ごとに整理した。党家村の「伝統習俗」は観光政策による「歴史文化」という大河の、地下表層部分に潜流し続ける伏流水に似て、祖先から親、親から子孫へと、つながり続けてきたものであった。党家村が最も栄えた清代や民国期の棺材をめぐる孝子譚には、死者を悼み、撫でさすることが象徴的に描かれていた。伝統的な棺材の準備が継承される一方で、孝子であるべき息子が「不孝」と思われないうために、親が子を思いやり棺材を準備するケースもあった。多様化する過寿儀礼だが、儀礼が伝統的形式を保持しているかが重要なのではなく、関門を乗り越え、新しい力を得て老人が再生する時間を秩序づけることが重要であることがわかった。喪葬儀礼の中で火葬、土葬の選択肢があったが、火葬は、火葬政策推進の政府官僚を「正真の中国人」として模倣され、土葬は、村の共同体や祖先を「正真の中国人」とし模倣された。骨灰盒を棺材に入れ土葬する背景には、共同体が認める「正真の中国人」となり、死者の実質が共同体に属していることと、祖先の祀りをする場所の継続が目指されたのである。祭祀儀礼では、個人的表象としての祖先祭祀が主となり、清明節は宗教的側面を残さない文明的な祖先祭祀となったが、党家村の墓碑には祖先-親-孝子を繋ぐ表象が残っていた。棺は墓の下にある故人の家、祖先の家であり、祖先の祀りをする場所を示す道しるべであった。

結語

第1章から5章までみてきた「孝」の言説から、棺材とは何なのか考察した。棺材を準備することは喜事であり、親から子へ「孝」を受け渡す象徴であり、自分が土に帰る家であり、祖先となる家であり、祖先となった者を祀る道しるべであった。棺材は、安くない金銭を払って親の苦勞に感謝して孝子が作ってくれたものであり、老人にとってこれは誉れであり、自慢であった。